

第5回公共事業評価システム研究会議事概要

日時：平成14年7月24日（水）10：00～11：30

場所：国土交通省11階特別会議室（中央合同庁舎3号館）

委員：

家田 仁 東京大学大学院工学系研究科教授

石田 東生 筑波大学社会工学系教授

金本 良嗣 東京大学大学院経済学研究科教授

小林 潔司 京都大学大学院工学研究科教授

* 中村 英夫 武蔵工業大学教授

根本 敏則 一橋大学商学部教授

森杉 壽芳 東北大学大学院情報科学研究科教授

森地 茂 東京大学大学院工学系研究科教授

50音順、敬称略、*は委員長、欠席：根本委員

議題

公共事業評価の基本的考え方（案）について

その他

主な意見（以下は委員発言を事務局の責任において取りまとめたものである。）

- ・ 事業効率の部分については、通常、費用便益分析が使われるが、これを総合評価の中でどういう形で扱っていくかというのは非常に重要な点だと思う。基本的に、費用便益分析の考え方は、可能な限りすべての要因をそこに取り込んで1つの尺度で評価していくというアプローチであり、費用便益分析をまともにやったら波及的影響のほとんどの部分がこの中に入る。そのため、最も重要なことは、項目間の重複をきちんと明確にしておくことである。

また、この総合評価は全部やりきれないときどこからやるか、いずれはやるが今年はどこをやるかなどを決めるために使うなどいろいろな使い方が考えられる。使い方に応じて指標の作り方は違うことになるので、そこまで考えて設計をしなければならぬし、どういうものとして使っているんだという説明もできるようになる必要があると思う。

費用便益分析が理想的な形でできれば、 B/C が1を下回るようなプロジェクトは他の評価項目がいかなる値であっても採択すべきではない。公共事業をするよりは減税や福祉に回した方がよいからである。総合評価はこれに反した結果にならないようにしなければならない。

- ・ 事業効率のところでは経済性と書いているのを、例えば、利用者便益とか、何かもっと限定的なものだけ扱っているというような書き方にすればどうか。
- ・ 利用者便益が転移して波及効果になるので、利用者便益に限定したとしてもダブルカウントの問題は残る。
- ・ それは項目設定の仕方の問題で、費用便益分析で既にカウントしてあるものと、カウントしていないものとどのように分かれるか、ある程度明示したほうがいいのではないか。公平性の観点からの評価項目と、効率性の観点からの評価項目とを明示的に分けたらどうかと思う。また、これを重みづけした結果、何に使うのかという目的については、同じ事業部門の中の相対的な順位づけをやるということだと思う。
- ・ 事前評価と再評価の間で、この総合評価の方法をどのように使い分けていくかという問題がある。「事前評価と再評価の時点で変わる項目はあるのか」、「2つの総合評価は評価の視点が異なっており、総合評価の得点が異なるだけで評価が自動的に決定されるものではない」ということをきちんと整理しておく必要があると思う。

- 資料2 - 1について、評価を行うことでこのプロジェクトのこのところが問題である、だから、もう少しこのところを注意しようというような使い道もあるということの評価の目的のところに書けないか。

2点目は、序文の考え方のところで、科学的な手法といっても結局は現在生きている人間の価値判断によってやっていくしかなく、本当は神にしかわからないようなものを神ならぬ身が決めなければならないというところに非常に困難があるが、我々は努力して、苦労して評価しているんだというニュアンスをもう少し入れる謙虚さが欲しいと思う。

3点目は、だれがいつ評価したのか、ウエートはどういう人がやったのかというのを明記することが大事である。明記することによって責任が生じる。

4点目は、一体何を評価の対象にしているのか、公的資金が投入されている公益事業みたいなものを対象に含めるのかといったことが書いていないこと。

最後に、景観デザインというのは調和も大事だけれども、個性の主張と新しい価値観の創出というデザインの根本にかかわる問題になるわけで、一定の価値観を押しつけるようなことよりは、むしろ配慮することが重要であり、環境の価値をつくり出すことも重要である。しかし、それぞれは、デザイナー者の責任においてクリエイティブにやっていって欲しいというように、もう少し柔軟性を持たせておいた方がいいと思う。

- この評価の方法のアウトプットの使い方に関して、事業内で一覧性をもって結果をプレゼンテーションすることが非常に大きいと思う。1つの事業と見た場合に、一覧性をもって表示すべき事業の範囲というのはどの程度を考えるべきか議論が必要だと思う。なるべく広くした方がいいとは思いますが、広くすると、それだけその事業の特殊性とか、地域性というのは失われることになる。

一覧性に関しては、現在だけでなく過去の事業もできる範囲で比較することにより、ツール自体の正当性の確認や今までのことを振り返るという意味でも非常に大事になるので、トライして欲しい。

また、評価者間のずれなど、いろいろなずれが出てくることになるので、そのようなずれの存在を認めた上で、その原因、あるいは考察というのをいかに明示するのかというのが非常に大事な作業になってくると思う。

- 資料 2 - 2 の 3 4 ページの総括表について、評価者のコメントという欄に何を書くのかよくわからない。なぜこれを採択したのかというところが大変重要になるだろうから、もう少しここを大きくくりでもいいから幾つかの項目に分けて、少なくとも欄は大きくして書いていく必要があると思う。

2 点目は、資料 2 - 3 の事業分野間での評価指標等の整合性の確保への対応について、それぞれの事業でなぜ違うのか、どこにポイントを置いてやらなければならないのかということを説明することが重要で、一緒にしようという方にばかりベクトルを向けることが本当に正しいのか非常に気になる。

3 点目は、資料 2 - 3 の不確実性のところの事業遅延について、社会的損失とあるが、経済的とか、財務的とか、総括表の中にある 2 つの項目をはっきり出さないと、一体何を言っているのかがよくわからない。また、感度分析の事業期間について、事業期間を見直したというのをあまり聞いたことがないので、同種・類似事業でデータのストックが本当にあるか。

最後に、資料 2 - 1 の事後評価について、目的を 3 つにした方がいいと思う。第 1 点は、事前評価と事後評価をチェックして当初計画どおりになっているか確認する、あるいはそれを通じて次のステップに向かって分析をやる。もう 1 つは、感度分析のためのデータを蓄積する。このデータの蓄積には 2 種類があって、1 つは不確実性等のデータを蓄積し、その分布形をはっきりさせていくことであり、もう 1 つは事業によって地域がどう変わったのか、あるいは経済効果がどれくらい上がったかなど、やや漠然としたような話について一般的な情報を蓄積することである。

それから、3 番目は、最低の合格ラインを超えたか超えないかを確認する機能に加えて、もっと何かいいことがあったのではないかと検討する機能を目的に追加した方がいいのではないか。

- 不確実性の対応における感度分析は、1 割減とか 1 割増とかで分析している例が多いが、これはあまり意味がない。実際には難しい面もあるが、ベストケース・シナリオ、ワーストケース・シナリオで、できるものによっては整理をしていく方がいいと思う。
- こういう評価の方法による分析というのは今までやったことがないわけで、これからもっとたくさんやっていって、その経験を蓄積していく、その中で改良すべきところは改めていくということなのだろう。

また、事後評価について、単に評価だけでなく、我々がやってきたプロジェクトについてそのときどきにどのようなことを考えたというのが極めてはっきりしてくる。それを採択の順位付けにも活用すればいいということになる。

- 既採択事業についてどこが合っていてどこが合っていないかという検証をたくさんやることによって、少なくとも今まであいまいだった優先順位についての考え方がある程度明示化されてくるということであらう重要である。それで、合わなかった場合の原因は何かということをもう少ししつこく追求していく必要があるのではないかと思う。
- 資料2 - 1で、費用便益分析というのが全体の評価の方法にどのようにつながっているのかについて、議論の整理が多少いるのではないかと思う。

それから、評価の視点として事前評価、再評価、事後評価という言葉が出てくるが、事前評価の段階で、将来どうということが起これば、再評価で中止する可能性があるなど、いわゆるリスクを評価指標として総合評価の中でどのような形で取り入れていくかという位置づけが必要になってくると思う。

また、感度分析をやるというのは、結局また再評価でワーストシナリオにいったら何かもっと見直す可能性も起こり得るということにつながってくるので、事前評価と再評価、あるいは事後評価、これを結びつけるような検討が必要になってくると思う。
- 今日いただいたご意見を整理して、直すべきところは直すとして、その先をどうするかについては、とにかくこういう評価の方法についてトライアルをこれからはばらく行い、そのいろいろな結果を見て、また修正を加えていくという形にするということでもいいのではないか。
- 例えばこういうことを毎年やりますということをどこかに宣言していただきたい。同一事業の中での相互比較ができるというようなことからすると、やはりそれなりのところでまとめて評価をするということも大事だと思うので、評価をだれがするということも、ぜひどこかに盛り込んでいただければと思う。
- 評価の方法について、経験を蓄積しながら直していくというのはそのとおりだが、あんまり悠長にやっているわけにはいかない。100%のものでなくても、我々としては現時点で考えるのはこれがベストであるというのはなるべく早くはっきりさせないといけないと思う。
- 評価というのは、絶えず何か新しいことを考えついたり知見を出したり、次の一歩のために使うほうが利口であり、制度を改善するところにもつなげるべきだと思う。

- ・ 評価は批判から始まったので、社会に対してどう説明するかというところに目が行きがちである。このような評価の方法を通じて、内部の意思決定の仕組みについて一体何をやっているかということを考えてもらうことに大変意味があると思う。
- ・ 評価の方法について、こういう形で評価をしていくというプロセスの中でいろいろな項目を体系的に議論し、そしていろいろな人がいろいろな立場で評価する。そのための共通の下敷きを持ったというところに一番大きな意味があるのではないか。